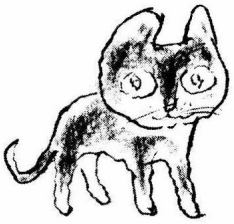
みな子のねがい

竹内恒之 作　山中冬児 絵

みな子のねがい

竹内恒之作　山中冬児絵



NDC 913
偕成社　180p.　21cm　1986年
Printed in Japan

みな子のねがい
一九八六年六月　一　刷
定価　九五〇円
著　者　竹内恒之
発行者　今村　廣
印刷所　新興印刷製本株式会社
発行所　偕成社
東京都新宿区市ケ谷砂土原町三の五　〒一六二
振替　東京五―一三五二番
電話　編集部　二六〇―三二二九(代表)
販売部ほか　二六〇―三二二一(代表)

©竹内恒之　山中冬児　一九八六
ISBN4―03―634110―3
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

はじめに

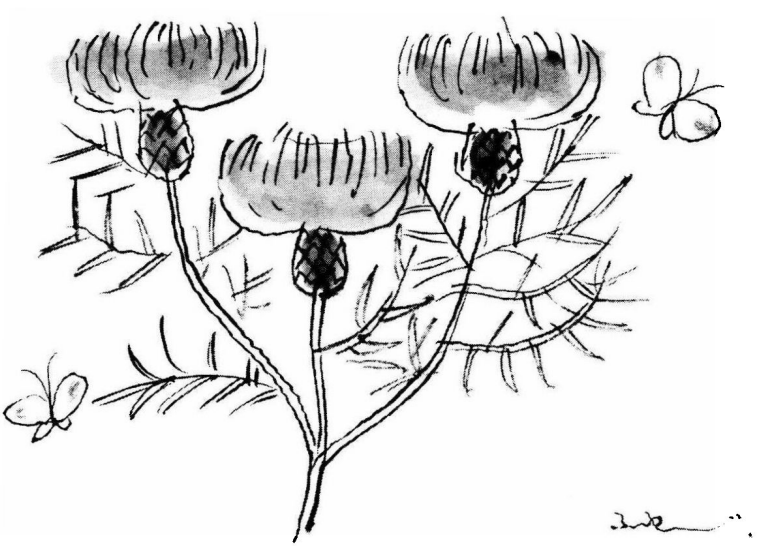
みな子ちゃんの話には、もう、びっくりさせられてしまった。

だって、ぼくたちがつかっている文字に、〝すみ〟と〝点〟という、二種類の文字があるというんだから。

〝すみ〟と〝点〟……？

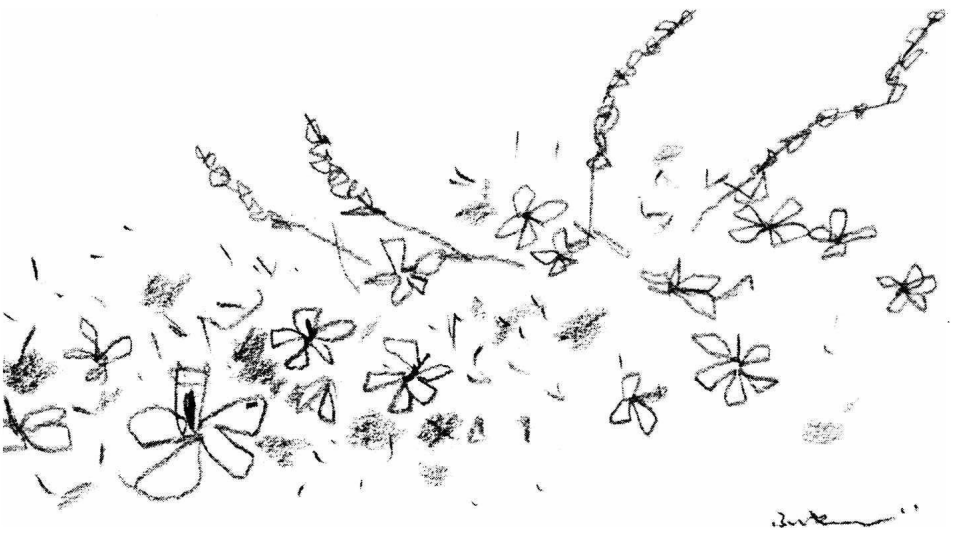
いったいそれは、どんな文字なんだろうか。そんな文字があるなんて、みなさんは、きいたことがありますか。

〝すみの字〟の世界。そして〝点の字〟の世界。このふたつの文字の世界は、おなじものなのだろうか。



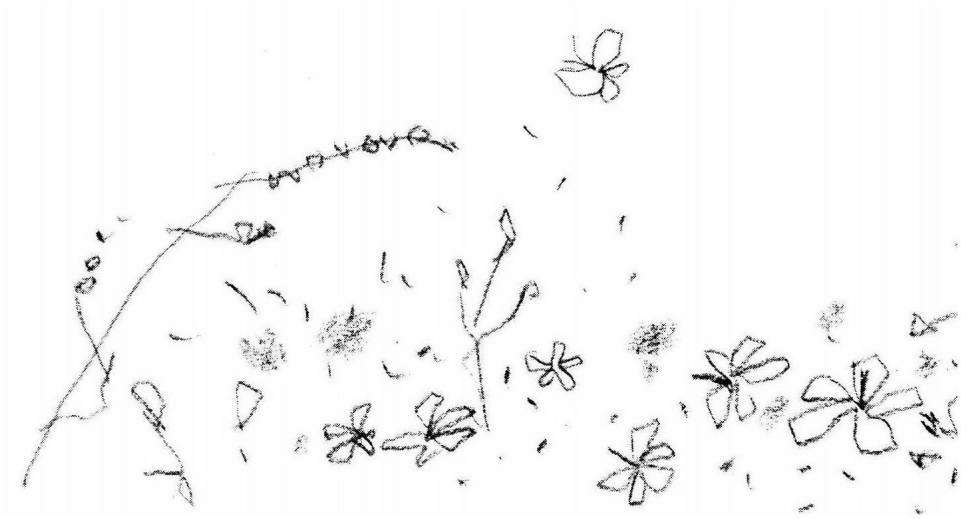
もくじ

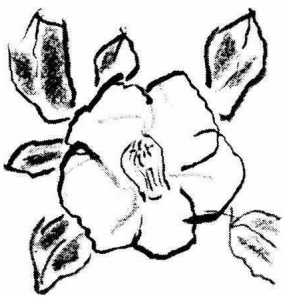
本屋さんがきらい……6
みな子のまっ白な本……11
見える子と友だちに……28
ホームからおちたっ!?……35
ゆびでよむ……49
白いつえの人……69
ひとこと声をかけて……89
〝すみ〟と〝点〟……103
たいへんな本づくり……112



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

すくない点字本……130
読書をたいせつに……143
みな子のねがい……160
よみたい本を自由に……168
読んでくださってありがとう……170





作者・**竹内**（たけうち） **恒之**（つねゆき）

一九四二年、東京に生まれる。早稲田大学商学部卒業後、毎日新聞社に入社。盲人用の点字新聞『点字毎日』記者。『長いながい道』『とべ！　おり紙トンボ』（共に偕成社刊）がある。

画家・**山中**（やまなか） **冬児**（ふゆじ）

一九二二年、大阪に生まれる。大阪美術学校卒業。叙情性豊かな画風で、さし絵・絵本界で活躍中。『コッペパンはきつねいろ』『東京からきた女の子』『二死満塁』『まほうのめがね』『長いながい道』など多数がある。

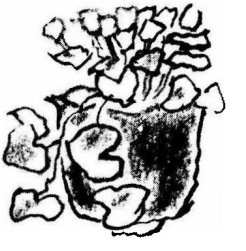
みな子のねがい

本屋さんがきらい

いつも先生にどなられているのに、きょうもまた、教室はガヤガヤしていた。ついに、長井先生のかみなりがおちた。

「しずかになさい！　あなたたちは、なんどいったらわかるの？　これから、先週かいてもらった作文をかえします。そして星野さんに、じぶんの作文をよんでもらいます。みなさんにもとても関係のあることですから、星野さんがよんだあとで、みんなでかんがえてみましょう。」

おもったよりも小さなかみなりだったせいか、教室内に、ホッとした空気がながれた。だが、ホッとするどころか、名まえをいわれたしゅんかんにドッキーンとし、カアーッと頭に血がのぼったのが、みな子だった。わきの下を、あせがツーッとながれおちていく



のがわかった。
（星野さんによんでもらいます、だって……先生のいじわる！）
全員の手もとにそれぞれの作文がかえされたのを見て、長井先生がみな子に声をかけた。
「じゃあ、星野さん、おねがいしますよ。」
もう、どうしようもない。みな子はかくごをきめた。大きく深呼吸をひとつし、しずかに本をひらいて、ゆっくりとよみはじめた。

わたしのきらいなもの

五年　星野みな子

わたしは、町の本屋さんがきらいです。といっても、本がきらいなわけではありません。きらいどころか、本は大すきです。でも本屋さんは、きらいなんです。
たしかに、目の見える人には、そして本のすきな人にとっては、あれほどたのしく、ゆめのあるところはないのかもしれません。わたしのお兄さんも、本屋さんには「どんな世界でもある」――といっています。
だけど、本屋さんの本は、あたりまえのことですが、どれもこれも、みんなツルツルしています。さわっただけでは、すべての本がみな、おなじです。わたしには、せ

いぜい、あつさと大きさ、それに紙質のちがいがわかるくらいです。

そしてなによりもいやなのは、本屋さんの本は、わたしになにもはなしかけてくれないということです。いいえ、じっさいは、はなしかけてくれているのでしょうが、わたしにはその声がききとれないのです。わたしはそれがいやなのです。

でも、学校図書館の点字本はちがいます。さわれば、そこにならんでいる点字が、いろんなお話をしてくれます。いろいろな世界があることをおしえてくれます。

だけど、どうして点字本というのは、こんなにすくないんでしょうか。きっと、いろんなことが原因しているのだとはおもいます。

わたしはいつもおもいます。もっと本がよみたい、もっと点字本がほしい、と。だから、あんなにたくさんの本がある本屋さんにいける目の見える人は、ほんとうにうらやましいなあ、とおもいます。

おわり

よみおわったみな子をつつむように、教室じゅうに大きなはくしゅがわきおこった。みな子ははずかしかった。が、どうじに、くすぐったいようなうれしさをかんじた。

長井先生の、「さあ、みんな、どうおもう?」というよびかけで、〝本〟についての討論

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

がはじまった。いろいろな意見がだされた。

家族の人につれられて、なんどか本屋にいったが、本だなや、そこにならべられている本をせつめいしてくれたので、そんなにつまらなくなかった、という意見。

マンガーコーナーに子どもがあつまり、みんなで立ち読みをしているらしいのだが、じぶんはよむことができなかったので、とてもくやしかった、という意見。

見える子どものために、あんなにたくさんの図鑑があるとは知らなかった、という意見。

町の小さな本屋さんでもいい。そこにある本とおなじぐらいの点字本が学校図書館にあったら、どんなにすばらしいだろうか、という意見。

と、本や読書についての、さまざまなやみや意見が、つぎつぎと口をついた。みな子はおもった。

（みんな本がすきなのねえー。だけど、それなのにわたしたちの世界の本はすくない。そうだわ、これまでよりもっと本をたいせつにして、一冊、一冊をしっかりよまなくっては……）

さて、みなさん。ここまでよんできて、きっと〝点字〟とか〝見える人〟とかいう、あまり、ききなれないことばがでてきたことに、気づいたこととおもいます。

そうです。もう、わかったでしょう。この教室は、ある盲学校の教室だったのです。

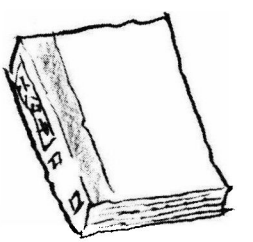
星野みな子。東京都内の盲学校小学部の五年生だ。みな子は、生まれてまもなくかかった病気がもとで、目が見えなくなってしまった。しかし、とてもあかるく、元気な女の子だ。そして、みな子は、電車通学をしている。といっても、ひとりで電車にのるのではない。お母さんが学校のちかくの駅まで、まい日おくりむかえをしてくれ、その駅から学校まではスクールーバスでかよう、という方法だ。だから、〝二人三脚〟のような通学なのだ。

みな子のまっ白な本

みな子はいま、帰宅をいそいでいる。だが、きょうはひとりだ。たまたま、お母さんに用ができ、みな子が電車をおりる駅までしかむかえにこれないからだ。でも、だいじょうぶ。駅のホームまでは、お友だちもいるし、そのお友だちをむかえにきたお母さんたちも、いっしょだもの。それにしても、きょうは、おもわぬことで教室での〝主役〟になってしまった。わるい気もちはしない。つい、心がなんとなく、うきうきしてしまう。

（駅についたら、いの一番にお母さんに報告しなくっちゃ。あたしの作文で、お教室のみんなが話しあいをした、なんてきいたら、お母さん、どんなにおどろくかしら。）

電車にのせてくれた友だち親子は、みな子の母に「いま、のりました」と電話し、はんたい方向にわかれた。電車はすいていた。いつものように、ドアのそばの席にすわった。



（さあ、よもうっと。あと三十分は、電車にのってなけりゃならないんだし。）

みな子はカバンから本をとりだした。だがその本は、まるで学習大百科事典とか、あるいは図鑑、といった、ものすごいぶあつさをしていた。とても、ふつうの本の型ではない。

みな子は、本をひざの上におき、ページをひらいた。が……。

ひらかれたそのページは、とおくから見ると左のページも右のページも、なんとまっ白なのだ。活字は、ただの一字も印刷されていない。もちろん、写真も絵もない。うそいつわりのない白紙、なのだ。だが、みな子は、すました顔だった。

みな子は、左ページのいちばん上のところに右手人さしゆびをもっていった。さらに、その右手人さしゆびのさきで、ページ最上だんの左はしのぶぶんをさぐった。

なにかをさぐりあてたのか、ゆびさきはピタリ、ととまった。と、つぎのしゅんかん、そのゆびさきはまっすぐ右のほうへ、スウーッとすべっていった。ちょうど、横書きにした書類のいちばん上の行にゆびさきをおき、その行を左から右へ、ゆびさきでなぞっていくようにだ。

みな子は、その〝ゆびすべらせ〟をくりかえした。しずかに、そしてきそく正しく、ゆびさきを左から右へとうごかしていった。その一行をさわりおえると、ゆびさきをその一だ

ん下の行にうつし、また左から右へ、とすべらせた。

なんともふしぎな動作だ。

さっきから、みな子のむかいがわにすわっているおばあさんなどは、ただただポカンとした顔で、みな子がすべらすゆびさきを、じっと見つづけているだけだ。きっと、

（おやまあ、あの子ったら、いったいなにをしているのかしらねえ。まっ白な紙をゆびでなぞってばかりいて……）

とおもったにちがいない。しかしおばあさんが、そうおもったのもむりのないことだ。おばあさんのところからは、みな子のひざの上のものは、ただの白紙をなんまいもかさねてとじたもの、にしか見えないのだから。まさかそれが〝本〟であるなどとは、おもってもみなかっただろう。

ところがこのまっ白に見えた本も、ちかよってみると、じつは、うわべがツルツルの白紙ではなかった。

たしかに、なにも印刷はされていないから、色は白一色だ。しかし、その紙の表面には、ボツボツとした無数の点がつけられていたのだ。その点は、うみつけられたガのたまごのように、きちんと、せいぜんとならんでいた。

みな子のゆびさきは、この〝点〟の上をなぞっていたのだ。
そうなのだ。これが、さっき、みな子の盲学校で話題になった、目の見えない人のための文字の〝点字〟――を打った〝点字本〟だったのだ。
みな子は、もうすでに本の世界にふかくふかくはいりこみ、むちゅうでゆびさきをすべらせていた。
ホームで、発車を知らせるベルがなった。
（あ、出発だわ。）
と、みな子がおもったときだ。タッタッタタタタタタ……、バタバタバタ……というホームをはしる数人の足音がし、
「やったねっ！」
「まにあったもんねっ！」
の男の子の声とともに、なん人かの子どもが車内にとびこんできた。そのしゅんかん、そのうちのひとりのひざが、みな子のひざの上の本のはしに、はげしくぶつかった。
本は、アッというまに、みな子のゆびさきをはなれ、どこかへすっとんだ。
「アッ……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com